

はじめに

◆物語の端切れ

いつの世にも、大著と呼ばれる長編物語や小説はいくつもある。書店には「あらすじで楽しむ○○」や「すぐに分かる○○」といった、それらのガイドブックの類も数多く並んでいる。それを手に取れば確かにストーリーが手早く分かり、その作品にふれたことには一応なる。訳知り顔で誰かにその作品について語り、それなりの感想を加えることも可能だろう。とはいえ、本当にそれで作品を読んだことになるのだろうか。それで済むのであれば、なぜ長編の物語や小説は実に長々と、ともすれば冗長ともいえる叙述を抱えながら編み上げられているのだろうか。ときには余分にも感じられるそうした部分には、実のところ、人間の生にとって欠かすことのできないエッセンスが詰まっているのではないだろうか。

文学はあらすじに乗らないところに味がある、と学生時代の筆者は教わったが、物語や小説においてあらすじだけを知りたい人にとっては切り捨てられてしまう端切れのような部分も、本当は大切な意味合いを持っているように思う。文学によって自分の生き方や考え方に何らかの影響や変容がもたらされることを望むのであれば、なおさらである。

◆つぶやきが生む物語

物語や小説を読む中で、登場人物が何となく口にした言葉がいつまでも心に残ることがある。もちろん、物語や小説の中に無数に散らばった言葉の数々は、前後の文脈があつてこそ意味をなすのであるが、文脈という衣を取り去った後に残るむき出しの言葉の断片は、読者の生きる（今・ここ）に解き放たれて、ときに人を導き、ときに人を励ます。ストーリーの展開にほとんど貢献しなかった半端者に目をつけ、そこから取り出して我々の生きる時間に蒔いてみれば、それが新たな水を注がれて芽を出し、予想もできなかった美しい花を咲かせることもあるだろう。それは、物語の端切れが読者を触発し、そこで新たな物語を紡ぎ始めたということである。

源氏物語が長編であることは今さらいうまでもない。その構成の巧みさや、そこに描かれる平安貴族たちの雅やかな世界が注目されることも多い。しかしそんな中にも、物語のメインストリームからはみ出しながらも、角度を変えて光を当てればそのときだけ輝くような比較的短い言葉の数々が、物語の谷間にたたずんでいる。ストーリーを追う中で素通りしてしまうにはもったいない原石が、そこにはいくつも眠っているのである（ノート①「源氏物語のジャンル」参照）。いわばそれは、源氏物語の「つぶやき」である。登場人物が独り言を言っているという意味ではない。誰に伝えるともなく、源氏物語がひっそりとつぶやいているのである。それは何も、光源氏の言葉とは限らない。ほんの少

しだけ登場し名前すらもはっきりしない端役であっても、彼らが発する言葉は源氏物語という作品の言葉であることに変わりはない。脇役だからこそ、主要な人物が気付かない真実を言い当てることもあるだろう。あらゆる階層の人物が声を発するからこそ、様々な物事が多面的に象られる。多様な声色が一つの作品の中で交響し、ときに変奏し、そうしたもののるつぼとしてこの物語はある。

それらの「つぶやき」は応用がきく。とはいえ、格言や教訓というほど大げさでなく、あの『徒然草』のような押しつけがましきもない。「つぶやき」の内容を無条件に「善きもの」として、この物語を聖典化することに意味はない。あくまでも、読者の生にヒントを与える「つぶやき」であり、正解や模範例ではない。源氏物語には、時代を越えてあらゆる人々の生にヒントを与える控えめな言葉たちがひしめいている。ストーリーの胎動が情感豊かに語り尽くされる一方で、それに付随するように、様々な作中人物の口を借りた数々のメッセージが息をひそめている。そうした「つぶやき」のフレーズを抜き書きしたのが本書である。それらを集めて我々の日常に注ぎ込むならば、そのひび割れに潤いを与えることにもなるだろう。後にも挙げるが、例えば松風巻には、「ならずらひならぬほどを思しくらぶるも、わるきわざなめり。我は我と思ひなし給へ」〔比較にもならない人を相手にしてお考えになるのも、よくないことです。自分は自分と思っていらいっしやい〕（松風・三・一九九頁、3132）というフレーズがある。源氏（31）が紫の上（23）をどうにかしてなだめようとする言葉である。詳しい説明は後に譲るが、このフレーズは現代の読者である我々にも多くの示唆を与えるものである。大仰

ない方にはなるが、それによって日々の暮らしに何らかの変化がもたらされるのであれば、それは、源氏物語によって新たな言葉を獲得し触発された読者が、新たな自己の物語を創造したということでもあるのだろうか。

◆本書の仕組み

改めて説明すると本書は、分かりやすくカラフルな入門書やガイドブックでは真っ先に割愛されてしまいそうな源氏物語の「つぶやき」のフレーズを一つひとつ集め、抜き書きし、テーマごとに整理したものである。もちろんそこには筆者の恣意の介在が避けられず、遺漏や偏向が当然あり得ることを断わっておく。本文の引用には角川ソフィア文庫を用い、原文と訳文の頁数をそれぞれ添えたので、参照も容易であろう。掲出するフレーズは基本的に原文で味わうことを旨としている。極めて感覚的な言いが許されるのであれば、原文は当時の社会で共有されている空気や諸条件に支えられて内容が緩やかに暗示され、様々な要素が凝縮されている。その一方、現代語訳の文となると、そのあたりの緊張感がどうしてもばらけてきて説明的かつ分析的になり、何とも散漫で間延びした言葉遣いになってしまう。翻訳は再現ではない。こうしたことから、やはり原文を第一に掲げたいと思う。ところで、中学校や高等学校で学習する「古文」の範囲は奈良時代から江戸時代までであるが、それを読み解くための古典文法は、源氏物語の成立した平安時代中期の日本語を規範としている。そのため本

書は、古典文法の生きた例文集としても最適であろう。また、小学校での古典の学習における、意味や文化の理解をともなった音読や暗唱などの活動に際して、源氏物語の素材集として活用することもできる。

そして、抜き書いたフレーズの補足説明もある程度丁寧にし、どのような状況でどんな登場人物がその言葉を吐いたのかが分かるように心がけている。引用するフレーズごとに物語の時間が絶えず行ったり来たりするため、一つの指標として、そのフレーズに関係する人物がそのとき何歳だったのかを、人物名の後ろにカッコ書きで添えた。また、ときにはエッセイめいた内容を筆者の教職経験などから書き添え、ときには現代批評や関連諸科学の知見を参照し引用もした。これらはできる限り源氏物語と現代との接点を探るという意図によるものであり、掲出したフレーズに様々な角度から光が当たるように腐心した結果である。中には説明過多となっている箇所もあるかもしれない。

他にも、必要に応じて「ノート」のコーナーを設けている。掲出したフレーズに関連する事項について一歩踏み込んだ解説を行ったつもりである。

◆もう一つの源氏物語

本書は、時代小説や恋愛小説とは違った、もう一つの源氏物語像を提示するものでもある。抜き書きするフレーズに様々な典拠や引き歌があることは承知しているが、本書はそうしたものをすべて指

摘しつづ読んでいく立場をとらない。どのような先行言説を借りてそのフレーズが成り立っているにせよ、それらはもはや源氏物語の言葉として我々の目の前にあるということを重ねるためである。本書は源氏物語の言葉についてその過去や来歴を振り返るのではなく、我々の〈今・ここ〉と掛け合わせることで、それをありのままに享受しようとするものである。そうして物語の言葉はストーリーのくびきから解き放たれ、場面や巻を隔てて交響し合い、多声的な意味を生成するはずである。切り離されることのでつながるものもある。

古典文学作品と現代社会とを安易に接続することについては、若干の抵抗を覚える向きがあるかもしれない。格調高い古典が我々の卑近な日常生活に関与するとは思えないかもしれない。古典文学を職業的に扱う者であれ、愛好家であれ、特に興味を抱かない一般人であれ、様々な事情を抱えつつ勉強する中高生であれ、日常の言葉で特に問題なく読める近現代文学と、そうではない古典との間には、意識の上で取り去りがたい大きな壁があることは間違いない。しかしその発想の枠組みは、昭和のごろに制度的に作られたものに過ぎない(ノート②)〔国語Ⅱ現国＋古典、という観念〕参照。両者は本来的に連続するものである。当たり前のことであるが、それを読む読者がいてこそ、文学は成立する。源氏物語と我々の生との接点を求めることによってのみ、血の通った享受は結実するはずである。

▼note ① 源氏物語のジャンル

文学作品は、その形態Ⅱジャンルによって分類されるのが一般的である。「文芸の世界を時間という座標軸に沿って縦に切ると文学史になり、二次元空間の座標軸に沿って横に切ると、文芸作品のさまざまななちすなわちジャンルが現れる」(小西甚一『古文の読解』ちくま学芸文庫、二〇一〇年)。源氏物語のジャンルは物語ないしは作り物語とされるのが通例である。とはいえ、源氏物語の中には物語という枠組みではとらえきれない要素が多数見受けられるのも確かである。源氏物語の執筆と編集は公的な文化事業であり、後宮の複数の人々による文学史上初めての公的なフィクションの制作であった。そのため、そうした環境で制作された源氏物語は従来のジャンルとしての物語を超えるものであったという見方もある(土方洋一『源氏物語』は「物語」なのか?、助川幸逸郎他編『新時代への源氏学Ⅰ 源氏物語の生成と再構築』竹林舎、二〇一四年)。

本書の方針は、「はじめに」のところで縷々述べてきたが、それは源氏物語を物語ならざるものとして読むという試みでもある。鎌倉時代において源氏物語が女訓書(女子への教育書)として享受されていたことはある程度知られているが、それに加えて昨今では、源氏物語の中に「権門子弟の教育論、作り物語論、女子教育論、返書論、音楽論、内侍論、結婚論、継母論」といった「現実の宮廷生活に生きる人々に、実際に必要とされていた教訓」についての「評論的語り」が見られ、「物語がそも